

2024 年新収蔵の金島桂華作品および資料紹介と 《蘇州留園雨後》について

中 村 麻 里 子

1. はじめに

ふくやま美術館は金島家より2024（令和6）年5月、金島桂華（1892-1974）の作品41点（額装40点、軸装1点）の作品寄贈を受けた。本画8点と素描33点である。当館では2003（平成15）年に「生誕110年 金島桂華展」を開催しているが、受贈前の当館所蔵の桂華作品は《魚心暖冬》（絹本着色 1936年 147.7×250.5cm 新文展招待展出品作）を含む5点を所蔵するのみであった。近隣の華鶴大塚美術館（岡山県井原市高屋町）では代表作《葡萄とダリア》を含む本画301点、素描140点、工芸品1点、書1点の計443点の桂華作品を所蔵している。また、菅茶山記念館（福山市神辺町）でも《猫》をはじめ36点の桂華作品を所蔵している。2022（令和4）年7月には、地元愛好家の所蔵品を中心とした「生誕130年 金島桂華展」（会場：菅茶山記念館）が開催されるなど、備中備後地域には現在でも熱心なファンが多い。

寄贈を受けた41点とは別に、未表装状態の資料が大量に保存されていた。紙の大きさは大小さまざまで、描かれたモチーフ別に見ると、「花」364枚、「鳥」77枚、「果物・野菜」79枚、「魚貝」46枚、「動物・昆虫」16枚、「樹木」116枚、「風景」9枚、「人工物（置物など）」9枚、合計716枚である。現地での素描や実物モデルを写生したもの、本画が制作される過程を示す小下絵、大下絵、草稿紙など様々である。描画材料やタッチを変えたり、さまざまな角度から対象をとらえようとしたりと、興味深い資料群であると同時に、展示の時に作品の背後を説明する資料として活用できると思われ、これらは美術資料として受納した。

当館では2025年9月27日～12月14日「秋季所蔵品展」にて「没後50年 金島桂華－自然へのまなざし」を開催する予定である。前述の寄贈作品41点と他の桂華作品とともに展示することで、金島桂華の画業全体における個々の作品の位置づけをしようと考えている。また716枚の美術資料については、描かれた画題ごとに整理し、まずは同展に関連性の高いものを中心に公開し、順次その意義を示していきたいと考えている。

2. 金島桂華の画業について

まずは金島桂華の略歴を記す。桂華は広島県福山市神辺町湯野に生まれる。本名政太。14歳のとき尼崎に移り西家桂州、平井直水に師事。1909（明治42）年大阪浪花絵画競技会展《舗装》で褒状、東京巽会展《花芭蕉》一等褒状。1911（明治44）年より京都の竹内栖鳳の竹杖会にて学ぶ。1918（大正7）年第12回初期文展（文部省美展覧会）《叢》出品、帝展（帝国美術院展覧会）・文展・日展（日本美術展覧会）に毎年出品、第6回帝展1925（大正14）年に《芥子》、第8回に《鳴九皋》、第9回に《牡丹》を出品し特選を得る。1929（昭和4）年、帝国美術院推薦となる。京都市立美術工芸学校教諭を勤め、画塾衣笠会を主宰するなど後進の指導にあたった。1934（昭和9）年帝展審査員、1959（昭和34）年日本芸術院会員、1960（昭和35）年より日展理事となる。1969（昭和44）年京都市文化功労賞受賞。桂華の作品は、写実を基調とした清雅な花鳥画で知られている。福山市名誉市民。

3. 《蘇州留園雨後》について

寄贈作品41点の中に、《蘇州留園雨後》と題する小品がある(図2、作品データはP.36参照)。大正11年は桂華30歳の年で、初期作である。中国的な画題を描いたこの時期の作品は数点あるものの、花鳥画の大家として、ひたすら花や鳥など、自然の中の生命の美しさを正攻法で描き続けた桂華作品の中では異質であり、資料としても貴重であるといえよう。

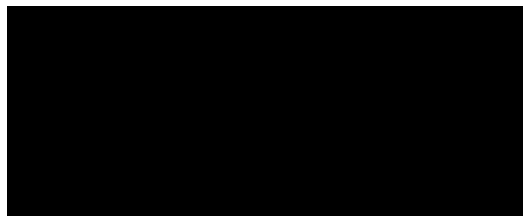
桂華は1917(大正6)年と1922年に中国を旅行しており、最初の1917年時は橋本関雪(1883-1945)と同行している。関雪は桂華より9歳上で、竹杖会の先輩であった。関雪は当時頻繁に中国に行き、呉昌碩(1844-1927)や王震(1867-1938)ら中国人画家とも交流し、自身のアトリエ「白沙山莊」に中国人を招いたりしている。「寒山拾得」や「玄宗皇帝と楊貴妃」など中国の故事に取材した作品を多く発表するなど、中国文化への強い傾倒が知られる画家である。

桂華の《蘇州留園雨後》は、橋本関雪からの影響が大きいことや、また中国宋元画風を自身の作風に取り入れようとしたことなど、30歳前後の若き桂華の状況を知る手掛かりとなる。まずはその作品について、画材の扱いや筆遣いなど細部を観察しその特徴について考察してみたい。さらに同年の第4回帝展に出品した《怡園一角》(所在不明)も中国風景を画題とした大作であるが、《蘇州留園雨後》との関連性についても触れてみる。

画題となった「蘇州留園」は蘇州4大名園の一つとされる。1593年に徐時泰によって造られたが、徐の死後荒廃し、18世紀末に劉恕が再建した。楼閣と太湖石群の見事な庭園である。《蘇州留園雨後》は、池に浮かぶ四阿に置かれた石卓に座り、青磁と思しき茶器で茶を準備する一人の人物が描かれる。この人物は紺青色の衣服を着て座っているが、それに呼応するかのようにもう一人画面右下に臙脂色の衣服を着た人物が描かれる。その人物は、池を覗きこむようなポーズで、かがみこんでいる。謎めいた雰囲気ではあるが、この後二人が一緒に中国茶を飲み、語らう様子が想像される。中国文人画で描かれる山水図には、点景人物がしばしば登場する。山深い四阿に一人の文人がいて、彼と清談をするために友人が歩いて訪ねていく様子が描かれるのであるが、本図はそれと通じるものがある。画中での二人の登場人物の心の交流を感じさせるように構成していると思われる。描かれた背景には、蔓のからまる橋の手すりや立ち並ぶ太湖石とそれらが映りこむ水面、白い石塔といった、中国情緒溢れる景観が見られる。

一方帝展出品作《怡園一角》(図1)に描かれた「怡園」は、留園から東南へ9kmほど行った所にある。清末の高官であった顧文彬が職を辞したあと故郷の蘇州に戻って造った庭園で、古典庭園の中では比較的新しい。桂華の《怡園一角》は、4曲屏風1隻の大画面に緑生い茂る巨木や草をにぎやかに配した中、画面左下にうづくまる1羽の鶴が描かれる。その鶴の背後や画面右下に水辺の風景が描かれ、奥行きを感じさせる構図となっている。多数の葉が複雑に配置された中、鶴の存在が静かな温もりを与えている。一見中国らしさを感じさせないモチーフ群かと思うが、画面左の穴のあいた石によって太湖石のある中国の庭園であり怡園であることが納得させられる。

橋本関雪がこの2年前の第2回帝展に、6曲屏風1双の《林和靖》を出品している。右隻は梅の大樹に寄りかかる林和靖、左隻は4扇目下方にうづくまる1羽の鶴が描かれる。中国北宋の詩人林和靖は、「梅が妻、鶴が子」とした故事で知られ、まさ



(図1) 怡園一角



(図2) 《蘇州留園雨後》 1922年 紙本着色 34.0×41.0 cm



(図3) 《蘇州留園雨後》
落款



(図4) 《蘇州留園雨後》
額裏ラベル



(図5) 《月ヶ瀬早春》 1922年 紙本着色 38.0×42.0 cm



(図6) 《月ヶ瀬早春》
落款



(図7) 《月ヶ瀬早春》
額裏ラベル

に定番の組み合わせであり、中国を好んだ関雪らしい作品である。一方の桂華の《怡園一角》は、関雪の影響から中国風景を描きたいと思いつながらも、胸中の原風景であるかのように描いたのではないだろうか。つまり中国であっても日本でも、自然の美しさは同じ、というような意味合いともとれる。その後も桂華の作品にはしばしば鶴が登場する。1羽であったり複数であったり、草花と組み合わせたりと様々であるが、鶴は桂華の主要なテーマであるといっても過言ではない。双鶴図など需要も多かったためか、かなりの数を描いたようである⁽¹⁾。また第8回帝展(1927年)出品の《鳴九皋^{きゅうこうになく}》は特選、宮内庁買上げとなった作品。3羽の鶴が天を仰いで鳴く姿を描いた作品で、桂華の代表作といえるものである。中国では鶴は出世や長寿を意味する吉祥のモチーフであるが、日本においても古来愛されてきたおめでたい画題である。大空を飛翔する姿、地をゆったりと歩く姿、等々どの角度から見ても美しく、創作意欲を常に刺激してくれるモチーフであろう。

橋本関雪の影響でいくつか中国を画題とした作品も手がけたが、その後の桂華は一筋に自身の花鳥画を追求し続けていく。桂華にとって中国趣味や異国情緒といったニュアンスは、追求し続けるほど重要ではなかったのだろう。橋本関雪との関係については生涯続き、同じ竹杖会の尊敬すべき先輩であり師ともいえる存在だった⁽²⁾。しかし桂華は自身の信念を貫き、「真面目すぎる」「描きすぎる」「面白味に欠ける」などと批評を受けても⁽³⁾、真正面から自然の中の花鳥の美しさを追求していったのであろう。

ちなみに、中国をテーマに描いた作品は菅茶山記念館が7件と、華鶴大塚美術館が2件所蔵している。《漁樵》⁽⁴⁾と《樓閣山水図》⁽⁵⁾、《梅花図》⁽⁶⁾には1917(大正6)年の款記があり、橋本関雪と同行した初回の訪中後の作品である。これらは尺五サイズといわれる一般的な縦長の掛軸で、中国の故事や山水を表現した軸装作品であるものの、当時流行した新南画風の表現である。華鶴大塚美術館の2点のうち、《西湖保淑塔新晴》⁽⁷⁾も、前述の縦幅に近い構図であるが、より緻密にしっかりと描き込まれている。もう1点の横幅《長江漁労図》⁽⁸⁾は、「己未歲夏六月白雲紅樹山莊半窓明之下寫 金桂華」と款記があり、1919(大正8)年6月の作であることと、「白雲紅樹山莊」で描いたことがわかる。本図はかなり関雪の画風に近い。

新寄贈の《蘇州留園雨後》は、横長画面で額装作品であり、中国の画題であっても、これら軸装作品とは趣を異にする。桂華本人が額装したもので、額裏には本人直筆のラベルが貼られている。それには「蘇州留園雨後 大正十一年作 桂華」と墨書し、「金氏桂華」白文方印が捺してある。この印は40歳前半から最晩年まで頻繁に使用された印で、署名も40代後半以降のものと思われる。若い頃の作品を、10年以上経過した後、懐かしんで改めて額装したもののようなのである。



(図8) 漁樵(左幅)
1917年



漁樵(右幅) 1917年



(図9) 樓閣山水図
1917年



(図10) 梅花図
1917年

同じく新寄贈作品の中に《月ヶ瀬早春》(図5)という作品があるが、これは梅林で有名な奈良の月ヶ瀬の風景であろう。雪がうっすらと積もる中、白梅が咲き誇る情趣豊かな作品である。画面裏にはやはり「月ヶ瀬早春 大正十一年作 桂華」と桂華本人書のラベルがあり(図7)、落款は「桂華」と墨書し「桂華」(朱文方印)を捺している。この印は、第2回帝展出品作《葡萄とダリア》(2面1組 華鶴美術館蔵)に捺されたものと同じである。《蘇州留園雨後》と類似した趣の作品であるうえ、ラベルの状態もほぼ同時期と考えられる。

《蘇州留園雨後》と《月ヶ瀬早春》は、30歳頃の桂華が表現の模索を続ける中での一つの試みであったといえる。この2点が当館の所蔵品となった今、作品を比較して見ることで、若い桂華の知られざる一面を紹介できると思われるものの、きちんと額装されていることから、何らかの展覧会で発表されたかもしれない。依頼作でも販売用でもなく、自身の思い出として手放さずに大切に持ち続け、その後遺族の元で保管されてきたのである。

4. おわりに

新寄贈作品41点の中から《蘇州留園雨後》を取り上げ、橋本関雪との関わりや、中国画題作品のこと、30歳頃の桂華作品についてなど述べてきたが、当時の関連資料等と合わせてさらに詳細が判明すれば非常に興味深いことである。他の39点の新寄贈品や716枚の美術資料についても調査を進め、桂華の画業研究の情報提供に追加できれば幸いである(作品データを次頁に掲載する)。

[謝辞]

本稿執筆にあたり、三宅利枝氏(華鶴大塚美術館主任学芸員)より多大なるご協力を賜りました。謹んで感謝の意を表します。

註

- (1) 大前勝信「金島桂華のツルと故郷・神辺」『生誕130年 金島桂華展』展覧会図録、菅茶山記念館、2022年。
- (2) 『開館1周年記念 橋本関雪と金島桂華』展覧会図録 華鶴美術館、1995年、5頁
- (3) 谷藤史彦「品格の様式美－金島桂華の芸術」『生誕110年 金島桂華展』展覧会図録、ふくやま美術館、2003年、158頁。
- (4) 《漁樵》1917年 絹本彩色 双幅 127.2×41.0cm 菅茶山記念館蔵(図8)
- (5) 《楼閣山水図》1917年 絹本彩色 1幅 130.8×41.8 cm 菅茶山記念館蔵(図9)
- (6) 《梅花図》1917年 絹本彩色 1幅 128.9×40.8 cm 菅茶山記念館蔵(図10)
- (7) 《西湖保淑塔新晴》1919年頃 絹本着色 1幅 130.0×41.8 cm 華鶴大塚美術館蔵(図11)
- (8) 《長江漁労図》1919年 絹本着色 1幅 63.1×81.7 cm 華鶴大塚美術館蔵(図12)



(図12) 《長江漁労図》1919(大正8)年



(図11) 《西湖保淑塔新晴》1919(大正8)年頃

金島桂華作品リスト

No.	作品名	内容	制作年	材質	員数	本紙サイズ(縦×横)cm	
1	月ヶ瀬早春	本画	1922(大正11)年	紙本着色	1面	38	× 42
2	蘇州留園雨後	本画	1922(大正11)年	絹本着色	1面	34	× 41
3	桜(扇面)	本画		紙本着色	1面	18	× 長径49.5
4	菖蒲	本画		紙本着色	1面	25	× 36.5
5	歳寒二友(紅椿と白梅)	本画		紙本着色	1面	44.5	× 52.5
6	菖蒲(扇面)	本画		紙本着色	1面	23.6	× 長径42.5
7	白梅図	本画		金地紙本着色	1面	26.5	× 24
8	南天に雪	本画	1968(昭和43)年頃	紙本着色	1面	26	× 23
9	朱芍薬	素描(花)		紙、水彩	1面	80	× 54
10	微風牡丹	素描(花)		紙、水彩	1面	71.5	× 53.5
11	紫陽花	素描(花)	1973(昭和48)年	紙、水彩、パステル	1面	50.8	× 39.5
12	黄蜀葵(トロロアオイ)	素描(花)		紙、水彩	1面	95	× 63
13	木蓮	素描(花)	1953(昭和28)年	紙、水彩	1面	31	× 44
14	鉄線	素描(花)	1961(昭和36)年	紙、水彩	1面	24	× 35
15	青鳩	素描(鳥)		紙、水彩	1面	28	× 42
16	黄鶯(キビタキ)	素描(鳥)	1947(昭和22)年	紙、水彩	1面	29.5	× 21
17	鶺鴒(セキレイ)	素描(鳥)	1937(昭和12)年	紙、水彩	1面	22	× 31
18	雀	素描(鳥)		紙、鉛筆、水彩	1面	19.5	× 14
19	葡萄	素描(果物)		紙、水彩	1面	28.5	× 37
20	柿	素描(果物)	1954(昭和29)年	紙、色鉛筆	1面	43	× 49.5
21	柿(2個)	素描(果物)		紙、水彩	1面	16	× 30.5
22	瓜	素描(果物)	1957(昭和32)年	紙、パステル	1面	19	× 28.5
23	金時鯛	素描(魚)		素描	1面	40	× 31
24	車海老	素描(魚)		紙、水彩	1面	40	× 58
25	螳螂(カマキリ)	素描(虫)		紙、ペン、水彩、色鉛筆	1面	14	× 21.5
26	バッタ	素描(虫)		紙、色鉛筆	1面	31	× 23
27	ブードル	素描(動物)		紙、墨	1面	19.5	× 17
28	猿	素描(動物)		紙、水彩	1面	22	× 16
29	曇日の丘	素描(風景)	1960(昭和35)年	紙、パステル	1面	15	× 35
30	養老にて(素描)	素描(風景)		紙、色鉛筆	1面	24	× 35
31	瀧 奥津温泉	素描(風景)		紙、水彩	1面	49.5	× 35.3
32	大山南面	素描(風景)		紙、パステル	1面	34.5	× 48.5
33	箱根美術館庭	素描(風景)		紙、水彩	1面	35	× 48.5
34	蹲距(つくばい)	素描(風景)		灰色紙、パステル	1面	49.5	× 64.5
35	箱根駒嶺	素描(風景)		紙、色鉛筆	1面	38.5	× 52
36	高崎山の虹	素描(風景)	1968(昭和43)年	紙、パステル	1面	24.5	× 35
37	紅葉	素描(風景)		紙、水彩	1面	49	× 61
38	紅葉	素描(風景)	1972(昭和47)年	紺色紙、パステル	1面	64	× 49
39	岳父のデスマスク	素描(人物)	1925(大正14)年	素描	1面	36	× 27.5
40	牧野虎雄之像	素描(人物)		紙、水彩	1面	31	× 24
41	倣大津絵	模写		紙本着色	1幅	69.7	× 32